

第二章

天寿を全うする

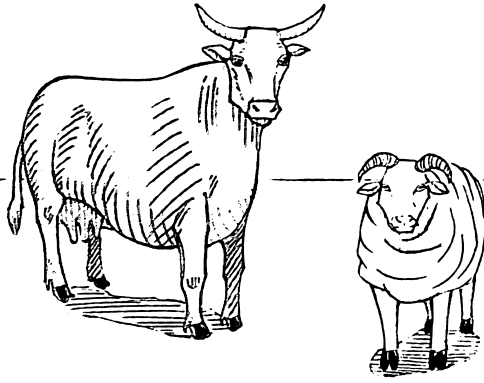
家畜たち

シンジルト

シンジルト Shinjilt

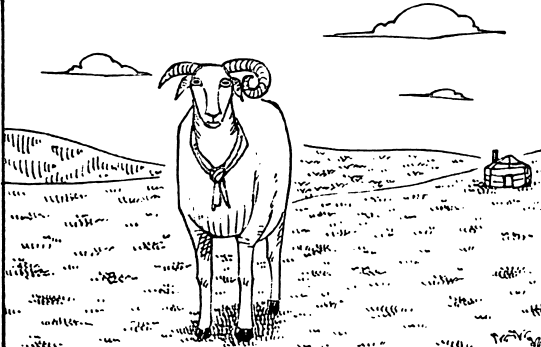
熊本大学教授。主な専門領域は社会人類学 / 内陸アジア研究。主な著書に『オイラトの民族誌——内陸アジア牧畜社会におけるエコロジーとエスニシティ』（明石書店、2021 年）、主な編著に『牧畜を人文学する』（地田徹朗との共編、名古屋外国語大学出版、2021 年）、『新版文化人類学のレッスン——フィールドからの出発』（梅屋潔との共編、学陽書房、2017 年）、『動物殺しの民族誌』（奥野克巳との共編、昭和堂、2016 年）、『民族の語りの文法』（風響社、2003 年）などがある。

我々にとって家畜は
通常 売られ 食べられる
対象である



しかし
そうではない
家畜がいる

そのひとつが
内陸アジアの牧畜民の
間で広く行われている
セテルという儀礼を
受けた家畜だ

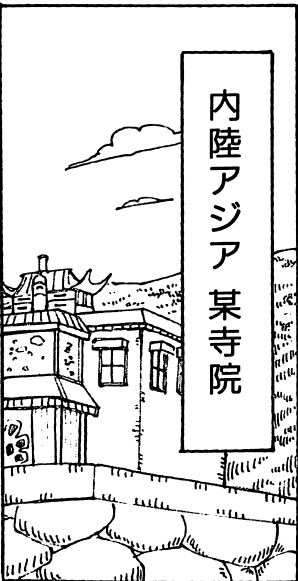


セテルされた家畜は
売られず 屠られず
天寿を全うする

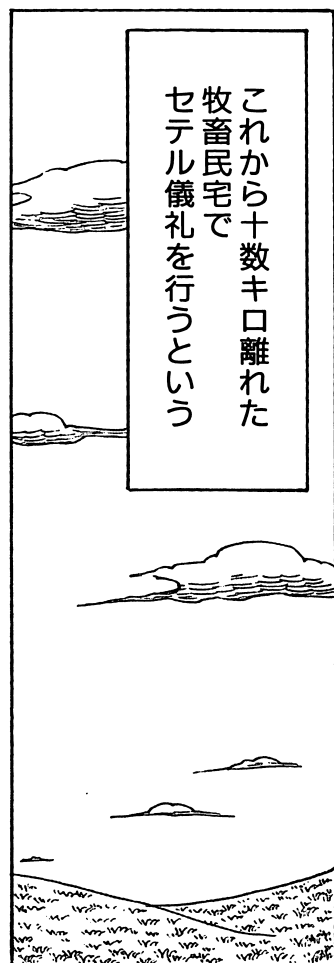
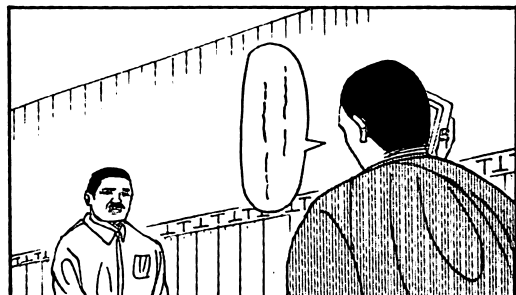
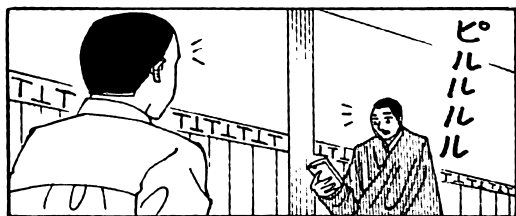
人間はただその世話をするだけだが
かといってペットとも違う

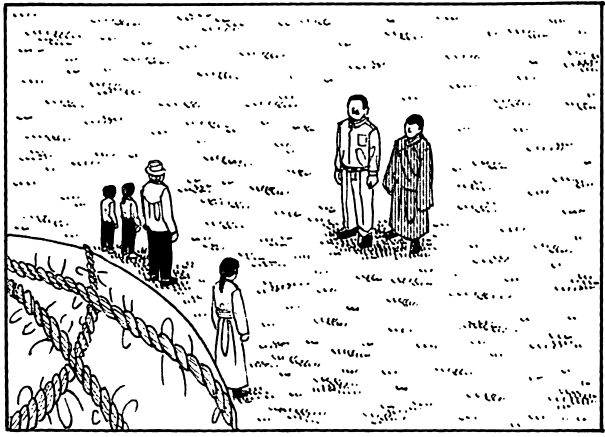
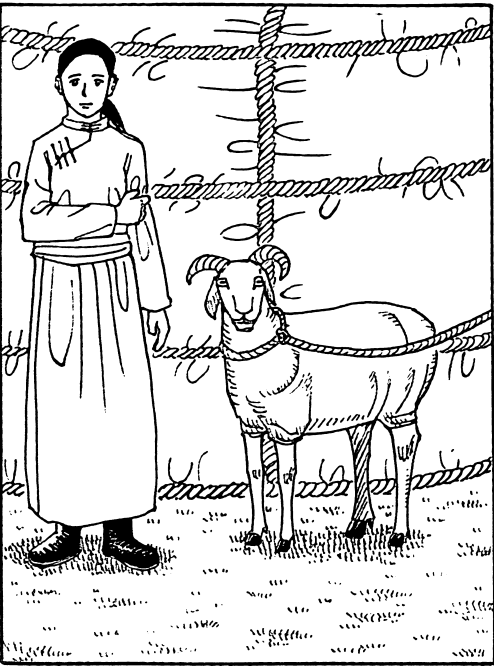
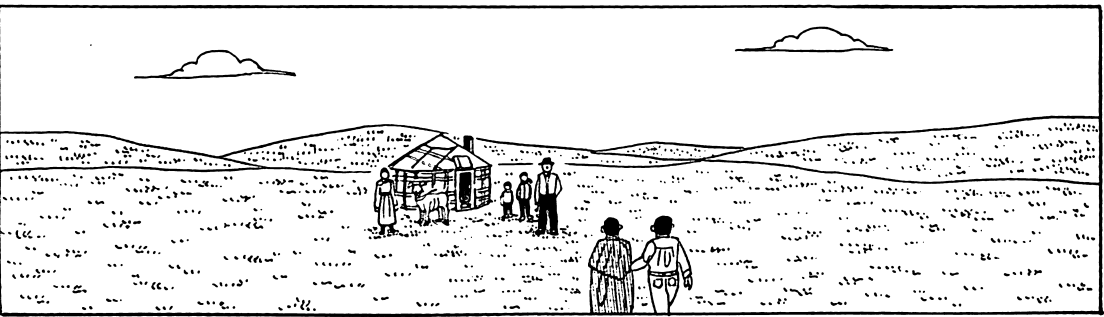
そんな家畜をなぜ
わざわざ飼っているんだ？

内陸アジア 某寺院

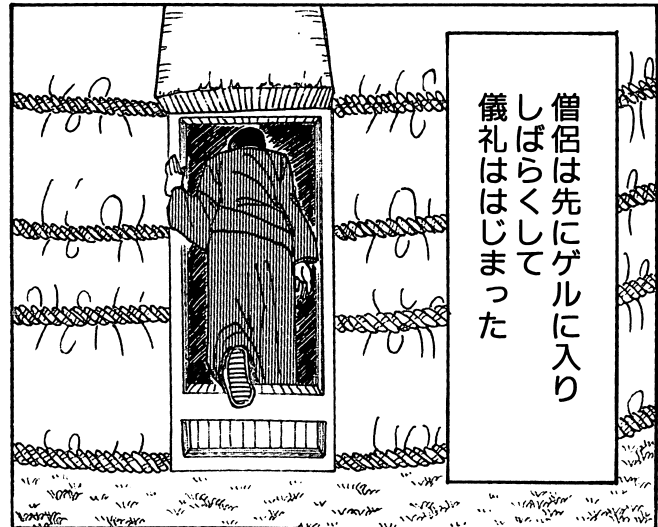


文化人類学者
シンジルト





そのプロセスは
次のようになる

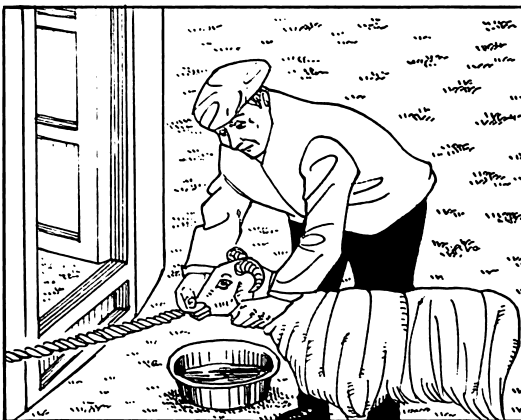


僧侶は先にゲルに入り
しばらくして
儀礼ははじまった

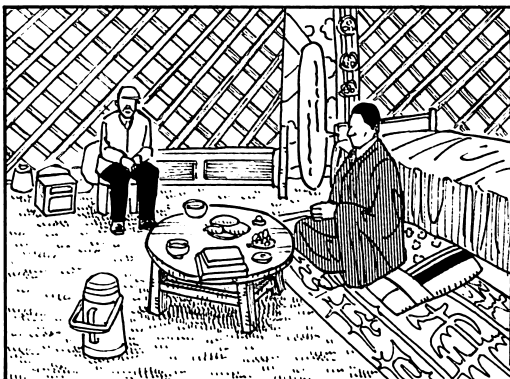


このヒツジが
セテル儀礼を受けるのか...

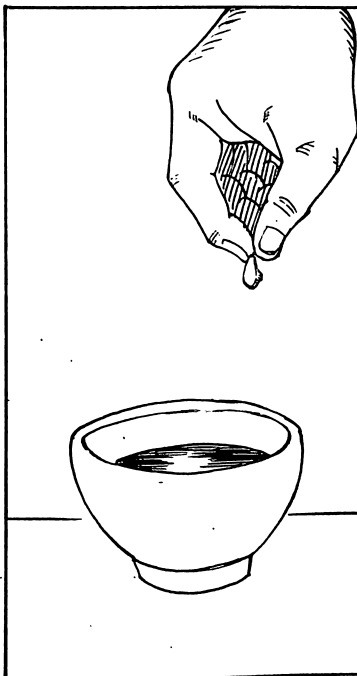
①先ほどの羊を
香と水で
清めはじめる



②その間 僧侶は
読経しながら
5色のリボンの
用意を命じる

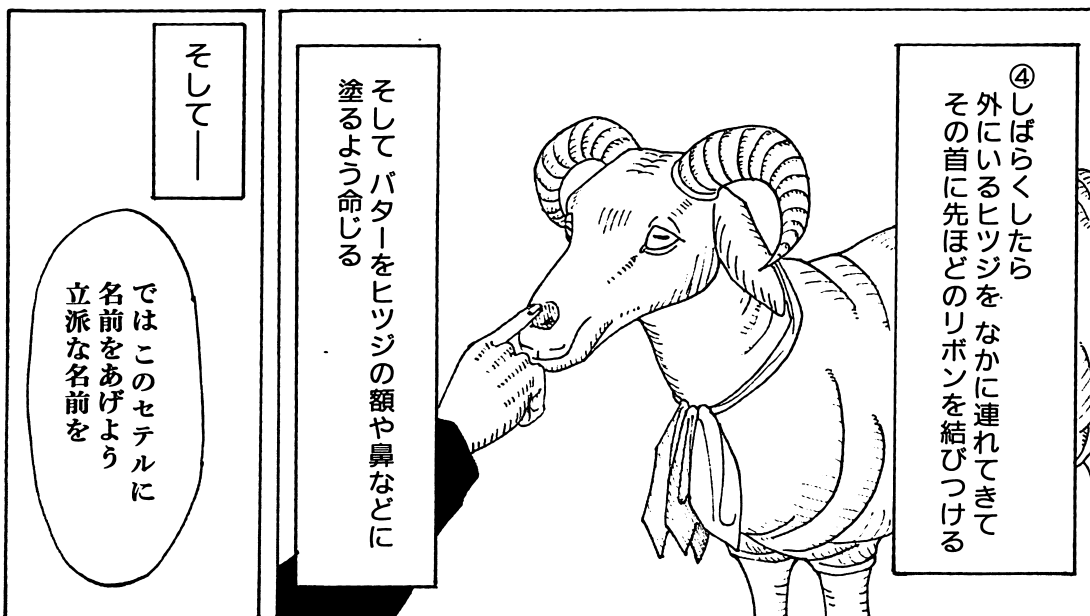


③次に僧侶は水を要求し
そのなかにゆっくりと
米粒を入れる





料理の匂いと
大音量のなか
読経が続く

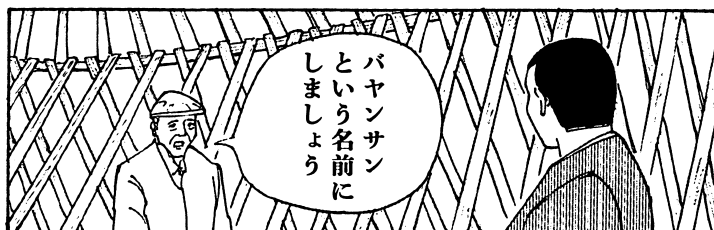


④しばらくしたら
外にいるヒツジを なかに連れてきて
その首に先ほどのリボンを結びつける

そしてバターをヒツジの額や鼻などに
塗るよう命じる

そして――

ではこのセテルに
名前をあげよう
立派な名前を



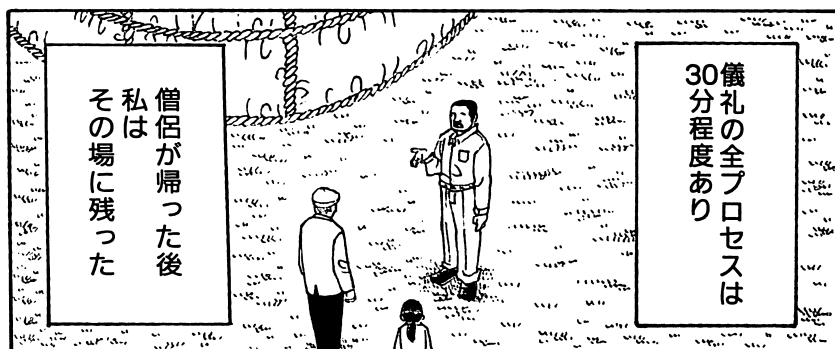
バヤンサン
という名前に
しましょう



よし
バヤンサンと
しよう



バヤンサンという白いセテルには
多くのケシゲを呼び寄せるように



僧侶が帰った後
私は
その場に残った

儀礼の全プロセスは
30分程度あり

こうして
儀礼は
終了した



ケシゲ？

ケシゲの
回復のためさ



なぜヒツジを
セテルに？

あらゆるものが持っている
絶対的幸運のことだよ



ケシゲを多く持つものは
生き生きとし
逆の場合は衰弱する

するとつまり
羊の持つケシゲが
減っていた

それを回復するために
セテルを行ったと？

ああ

でも厳密には
そうじゃないんだ

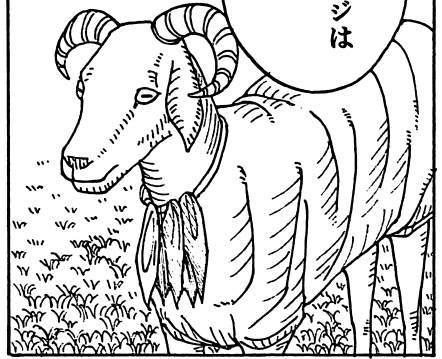
孫娘のケシゲを
回復させたかったんだ

!?

ヒツジをセテルしたのに
孫娘のケシゲも
回復するんですか？

ああ

ケシゲが回復したヒツジは
周囲にケシゲを
呼び寄せるからな

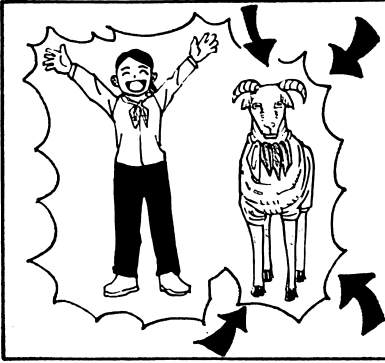


あの子は
ケシゲが
減っていた

つまりヒツジの
持つケシゲが
減っていた



ケシゲをセテルした
ヒツジが呼び寄せ
孫娘のケシゲも
回復するのさ



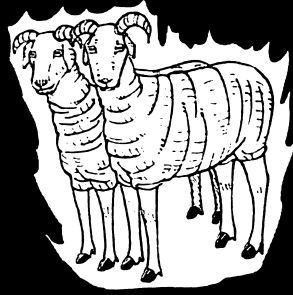
セテルされた家畜は
周囲にケシゲを呼び寄せる
存在となる

なるほど
そういうことだったのか

だから売られず
屠られず
ずっとそばに置かれるのだ

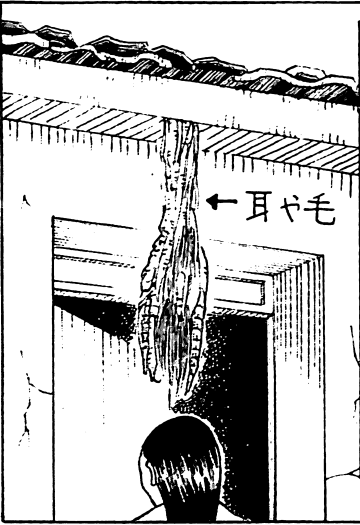


またセテルされてない
ほかの家畜にも
量の違いはあるが
ケシゲは宿っている



だからそれらを手放すとき
その一部をとっておき
少しでも幸運を呼び寄せるため
家に飾る者もいる

← 耳や毛



セテルの対象は
家畜以外にも及んでいた

樹木 泉など
人間以外のあらゆる
存在がその対象となり

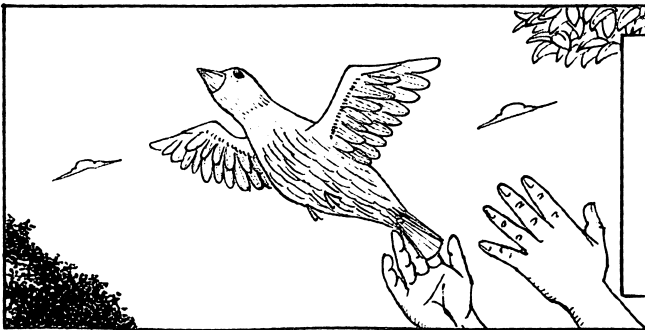


ケシゲを呼び寄せる
それらに対し
人間は手を出せなくなる

ケシゲは
あらゆるものの
なかにあり
そこに
境界や対立は
存在しない

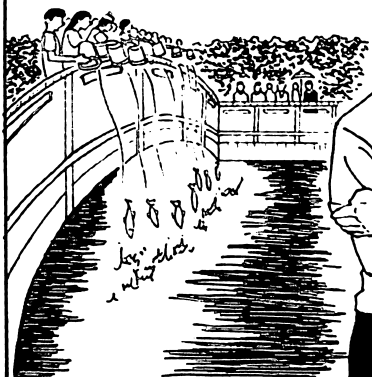


このような
セテルに相当する
言葉として
捕らえた魚や鳥を
放す「放生」が
ある



魚にがし

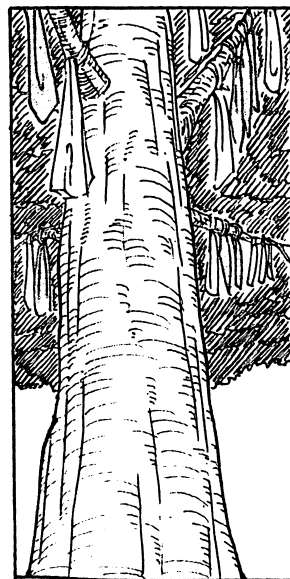
科学的指導



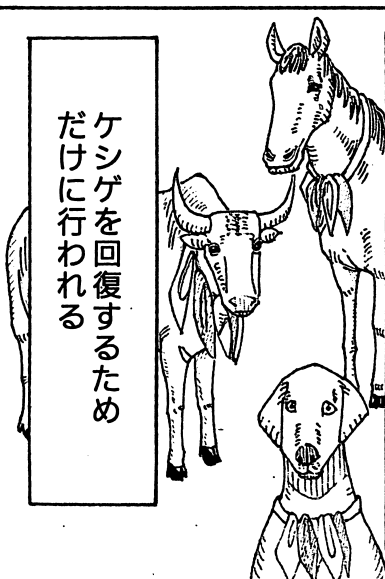
たとえば中国では
富裕層が善行や贖罪のために
珍しい動物を買い取り
公園や湖などに放ち
問題となり
現在は科学的な放生が
勧められている



また日本でも年に一度
「鳩にがし」や
「魚にがし」といった
放生会が
寺社で行われている



セテルにした樹木を伐採しないのも
そこに宿るケシゲを失わない
ためであることが大きい

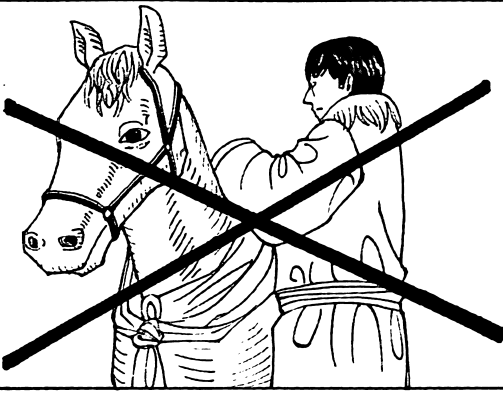


ケシゲを回復するため
だけに行われる

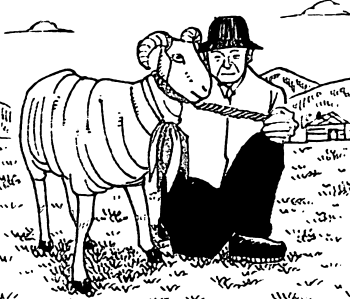
しかし 特定の動物種や時間
に行われる放生に対し
セテルはいつでもどこでも
どんなものに対しても行われ

このようなセテルの特異な考えは
「迷信」として扱われることもあった

社会主義政権下に
置かれた牧畜民は
一時期迷信排除により
セテルを行うことが
できなかった



しかし
1980年代以降
国家による宗教統制が
緩和されると
多くの牧畜民は
セテルを
復活させていった

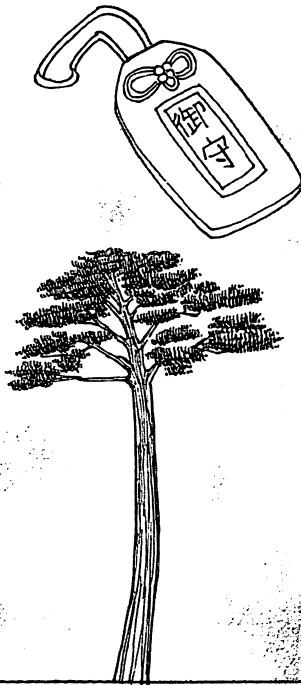


時代を超えて
セテルは牧畜民にとって
魅力的なものなのだ

セテルに似た行為は
我々も行っている



祈祷を受けたお札やお守り
津波から1本だけ生き残った樹木



そうした特別なものには
何かが宿っていると我々は感じる

セテルされ特別な対象と
なるものもランダムに
選ばれているわけではない



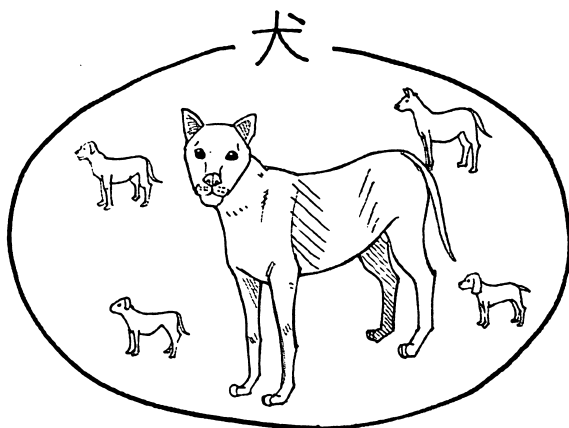
オオカミに襲われたが
1頭だけ生きのびた子ヒツジ
珍しい外見をしたもの



そういった特別なものが
セテルの対象となり
より幸運を呼び寄せるとされる

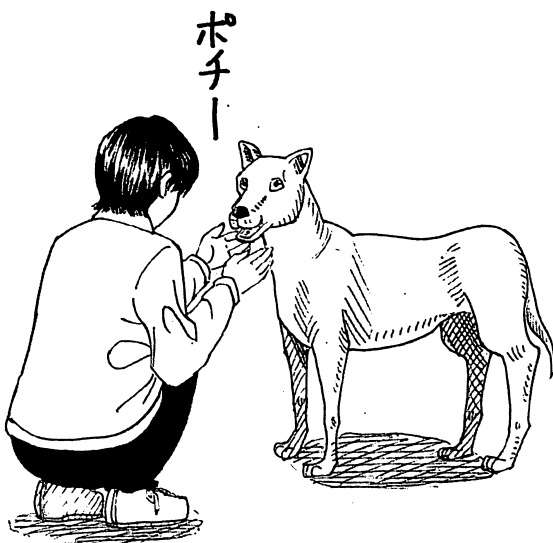
このとき
牧畜民はその対象を
「種」ではなく
「個」の視点からみている

「種」の視点とは
たとえばある犬を
「犬」という動物種の
一部としてみることであり



世界には
たくさん犬がいるが
みな同じとみなされる

「個」の視点とは
その犬を「ポチ」という
固有名詞として
みることであり



ポチは
世界で1匹しかおらず
代わりがきかない

我々は状況により
この2つを使いわけ
同じ犬が
「犬」とも「ポチ」とも
呼ばれる

ただの犬

ポチ!!

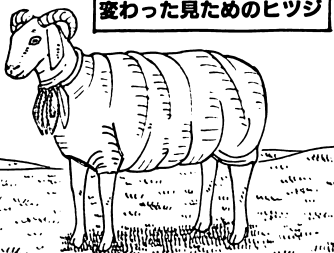


飼い主

第三者

このように家畜に
個性性を認め
名前をつけたりする行為は
多くの牧畜社会にみられる

変わった見ためのヒツジ



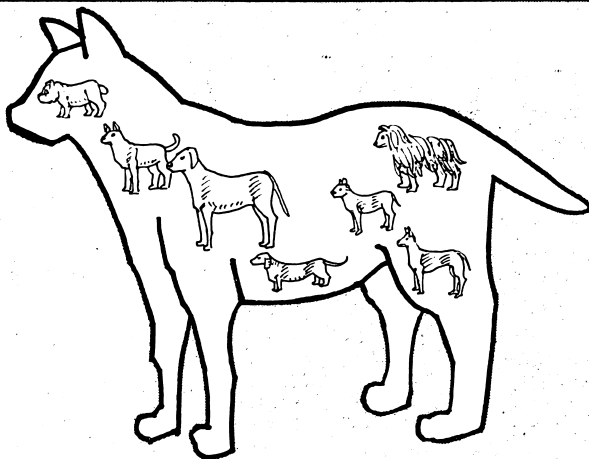
セテルの対象となる
家畜は単なる
「家畜」ではなく
ほかと置きかえ
不可能な
「この家畜」という
固有名詞として
みられている

すべてのもの
のなかには
絶対的幸運
である
ケシゲがある
とされる

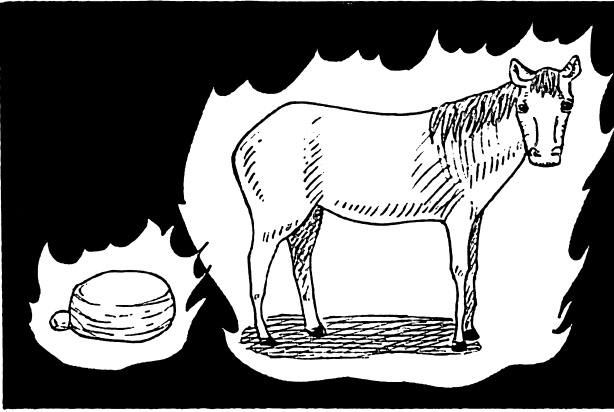


だがケシゲ
そのものは
みることが
できない

それは我々が
「ポチ」や「マル」といった
個別具体的な犬を
みることが出来るが
「犬」という種自体は
みることができないのに似ている



つまり
ケシゲは「個の視点」で
みることで
はじめて具体性を持ち
感じることが
可能となるのだ



種

・犬の歴史
・犬の習性

犬

個

・ポチの歴史
・ポチの習性

ポチ

しかし従来の人類学は
個の具体性を軽視し
「ポチ」や「マル」という
「個」の視点より
「種」の視点を重視してきた

そこでは
個のかけがえのなさが
消えてしまう



このような特徴を持つセテルの存在は
個をないがしろにしてきた
人類学の手法に修正を求めている
のかもしれない

体格が良い馬

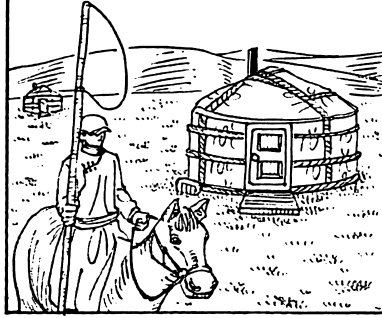


雷に襲われ
死ななかつた羊

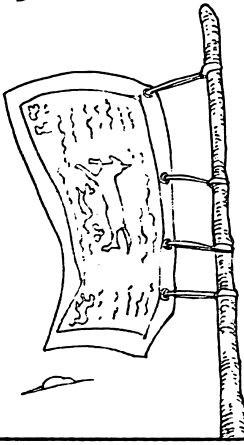
それに対しセテルでは
その対象となるものを選ぶときや
ケシゲを感じるるとき
「個」の視点も必要となり
セテルの理解には「種」と「個」の
両方の視点が必要だ



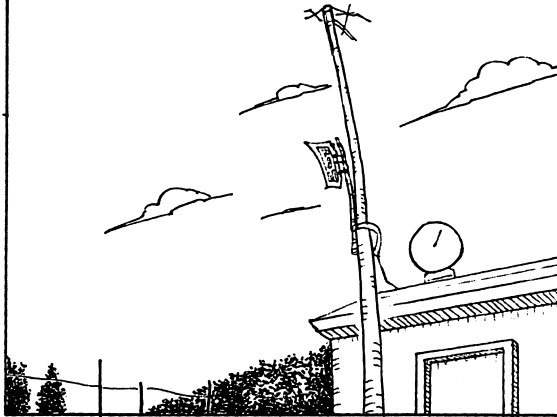
昔と比べると
セテルという慣習は衰退し
行われなくなったところもある



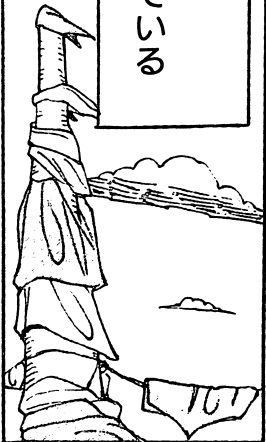
しかし
セテルのようなものは
ほかにもある



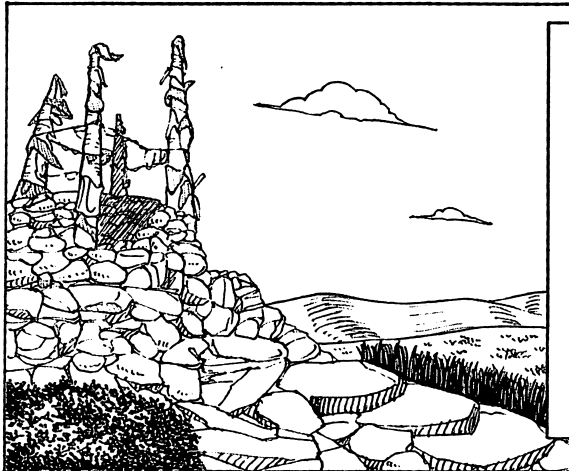
一家のケシゲを
維持するために掲げられる
キーモリという旗



そのどれもが幸運を
呼び寄せるために行われている



牧草地あるいは
地域全体の運勢を向上させる
ために祀られるオボー



不幸の回避

幸福の追求

その願望があるかぎり
セテルのような行為は
残っていくだろう

